

中青年学者外国语言文学学术前沿研究丛书

人称代词与亲属词的 中日比较研究

陈露 著

A COMPARATIVE STUDY ON
PERSONAL PRONOUNS
AND KINSHIP WORDS BETWEEN
CHINESE AND JAPANESE

外语教学与研究出版社
FOREIGN LANGUAGE TEACHING AND RESEARCH PRESS

——兼论日语的敬称与亲属称谓

人称代词与亲属词的 中日比较研究

■ ■ ■

A COMPARATIVE STUDY ON
PERSONAL PRONOUNS
AND KINSHIP WORDS BETWEEN
CHINESE AND JAPANESE

<http://www.dawidpao.com>

中青年学者外国语言文学学术前沿研究丛书

人称代词与亲属词的 中日比较研究

陈露著

A COMPARATIVE STUDY ON
PERSONAL PRONOUNS
AND KINSHIP WORDS BETWEEN
CHINESE AND JAPANESE

外语教学与研究出版社

FOREIGN LANGUAGE TEACHING AND RESEARCH PRESS

北京 BEIJING

图书在版编目 (CIP) 数据

人称代词与亲属词的中日比较研究 / 陈露著. — 北京: 外语教学与研究出版社, 2017.8

(中青年学者外国语言文学学术前沿研究丛书)

ISBN 978-7-5135-9397-7

I. ①人… II. ①陈… III. ①人称—代词—对比研究—汉语、日语②亲属称谓—对比研究—汉语、日语 IV. ①H146.2②H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2017) 第 203569 号

出 版 人 蔡剑峰
责任编辑 孔乃卓
封面设计 高 蕾
出版发行 外语教学与研究出版社
社 址 北京市西三环北路 19 号 (100089)
网 址 <http://www.fltrp.com>
印 刷 北京九州迅驰传媒文化有限公司
开 本 650×980 1/16
印 张 22
版 次 2017 年 8 月第 1 版 2017 年 8 月第 1 次印刷
书 号 ISBN 978-7-5135-9397-7
定 价 79.90 元

购书咨询: (010) 88819926 电子邮箱: club@fltrp.com

外研书店: <https://waiyants.tmall.com>

凡印刷、装订质量问题, 请联系我社印制部

联系电话: (010) 61207896 电子邮箱: zhijian@fltrp.com

凡侵权、盗版书籍线索, 请联系我社法律事务部

举报电话: (010) 88817519 电子邮箱: banquan@fltrp.com

法律顾问: 立方律师事务所 刘旭东律师

中咨律师事务所 殷 斌律师

物料号: 293970001

丛书序

进入新世纪以来,我国外语学科的学术研究呈现繁荣的局面,不仅学界专家、尤其是中青年学者的研究热情持续高涨,而且申报项目、出版论著或者发表论文的数量和质量也大幅度提高。以全国哲学社会科学规划办公室提供的数据为例,2014年国家社科基金年度项目和青年项目申报总数为28,186项,其中30-45岁这一年龄段共有17,729人申报,占总申报量的62.9%;经过评审,共有2395人立项,占总立项数的62.7%。这表明包括外语学科在内的中青年学者已成为学术研究的中坚力量。与此同时,外语学科的研究者除了在国内重要学术刊物发表高水平的论文之外,还不断开拓论著发表渠道,通过创办学术集刊等形式表达和传播学术思想。据统计,近年来,各高校创办的外语集刊达几十种之多,在国外刊物上发表论文的数量也逐年增加。形成这种局面的原因多种多样,但主要归功于研究者们探索新知的内在需求和国家激励学术创新的外部环境。

然而,由于种种原因,中青年学者仍然面临着专著出版难的问题。尽管他们大多在国内外接受过系统的学术训练,思想活跃、心智敏锐,能够迅速抓住学术前沿话题,撰写的专著具有较高的学术价值,但常常陷入出版难的窘境,即使几经周折得以出版,也是“零散型”的著作,淹没在书海中而难以产生较大影响,更无法形成“集约型”效应。从某种意义上来说,这是极大的智力资源浪费,也在一定程度上挫伤了中青年学者学术研究的积极性。

中青年学者是中国学术发展的希望。为了保护中青年学者的学术热情,推动他们在学术前沿勇于探索,多出成果,外语教学与研究出版社秉承“开放性、学术性、原创性、前沿性”的原则,设立“中青年学者外国语言文学学术前沿研究丛书”出版项目。“开放性”就是对全国各高等学校和科研院所开放,凡是希望通过这一项目出版外国语言文学类各领域研究成果的中青年学者,皆可申请加入;“学术性”是指研究成果具有较深刻的学术思想和观点,能够反映外国语言文学各领域理论和实践的本质和规律;“原创性”就是发前人所未发、想前人所未想,在研究内容和形式上有创见和创新;“前沿性”是指研究成果反映外国语言文学各领域的最新发展动态,具有前瞻性。近年来,随着计算机技术的广泛应用和全球化进程的进一步加快,外国语言文学学术研究的内容和形式

发生了变化,并呈现交叉融合的趋势。因此,我们鼓励中青年学者以问题为导向,运用新技术、新方法和新视角,对语言学、文学、翻译学、外语教学等诸多方面进行跨学科研究,力争推出一批集学术性、原创性和前瞻性为一体的最新研究成果,构建具有中国特色的外国语言文学学术话语体系。

首批入选“中青年学者外国语言文学学术前沿研究丛书”的专著共有十本:《教育语言学——一个社会符号的模式》、《文学交际中的读者:叙事虚构作品解读的自由与局限》、《翻译诗学》、《中国晚期二语习得者英语被动句加工的认知神经机制:行为与脑科学的整合研究》、《萧乾文学翻译思想研究》、《詹姆斯·马丁访谈录》、《英汉语篇跨文化修辞研究》、《莎士比亚戏剧中强调语的语用分析》、《基于语料库的中国英语学习者强化语型式和意义研究》和《国家形象与外宣翻译策略研究》,涵盖语言学、文学、翻译、外语教学等不同领域。

“中青年学者外国语言文学学术前沿研究丛书”注重质量和创新。首批入选的专著均经过专家审读和评阅。为确保丛书的学术品质,外语教学与研究出版社还将聘请资深专家担任系列丛书的顾问,并成立由外国语言文学学科领域知名学者组成的编委会,对申请出版的学术专著进行评议和遴选。本丛书项目将按照相关质量标准,组织专家对申报项目进行评审,入选者列入出版计划。

我们秉承严谨治学的态度,希望通过学术出版为学术传承与创新提供平台,但由于水平有限,书中恐有疏漏之处,恳请诸位专家和学者不吝指教。

外语教学与研究出版社
高等英语教育出版分社

2015年9月

序にかえて

本書は日本語・中国語の人間をさししめす語彙のうち、親族名詞と人称代名詞に関して、対照研究的な観点から記述し、考察をすすめたものである。あつかいが語彙論と文法論にまたがる人称代名詞と、ふつうはもっぱら語彙論であつかわれる親族語彙とが、ならんでとりあげられることには理由がある。日本語ではオジサン、オバサンなどの名詞が、人称代名詞のうけもつ領域にわりこんでつかわれたりすることがある。この現象は中国語にもみられるらしい。本書の著者、陳露さんは、その辺のことに関心をいだき、人称代名詞と親族名詞とを、あえておなじ平面にすえて研究対象にさだめた。ここから、日中両言語に関して、親族語彙、人称代名詞の体系を記述し、両者を対照させつつ、それらの統一と対立をとりだすという、本書の方向性がみえてくる。

日本語と中国語という個別言語において、人称代名詞と親族語彙とをまとまりとしてとりだすことは、これまでそうなされていないようだ。まして、両言語をめぐって、対照言語学的な観点から、両者を体系的にとりあげることは、本書以前にはみられなかったのではないか。こうして、本書は、日中両言語における人称代名詞と親族語彙をめぐって、体系の変遷を概観したうえで、現代日本語、中国語における使用の実態を調査し、事例にもとづいてふたつの語類の意味・用法をとりあげることからはじめて、人称代名詞・親族語彙にあらわれる両言語の異同を体系的にあきらかにしようとする。

これは人称代名詞や親族名詞に関する個別的な事実の指摘だが、中国語では人称代名詞が、一般的によびかけにはつかわれないことや、親族名詞はめした（とした）もそれで自称できることなど、事例にもとづいた日本語との対照研究のなかからとりだされた知見だろう。また、先行研究紹介では、古代日本語のきょうだい名詞に、男称・女称の区別があることがあげられているなど、めくばりがゆきとどいて

いる。うえにあげたことをふくめて、くわしくは本書にみてほしい。

本書の日中対照研究という面に関しても、ひとことふれておく。日本語・中国語の人称代名詞と親族語彙の実例は、本書では現代中国語、現代日本語からあつめられているが、いずれも方言の事実にはおよんでいない。もっとも、陳露さんは、中国語・日本語とも研究を方言にひろげる計画をもっていて、すでに中国でフィールドワークをはじめている。それは別にして、日本語方言を対照研究にくわえることの意義を、奄美語ほかの方言調査をつづけている松本として、若干のべてみたい。

人称代名詞については、日本語において語数がおおく交替がはげしいことが指摘されているが、奄美語ほかの琉球諸語では、（以下奄美語にみられるもの）単数1人称ワン単数2人称常体イヤー、敬体ナン、単数3人称アルィ、複数はそれぞれワキヤ、イヤキヤ、ナキヤ、アッターとなって、むしろ中国語同様簡素である。古代日本語もこの点でかわらないことなどが視野にはいってくると、研究がまた展開しそうである。

親族語彙をめぐるのは、さきにみた古代日本語のきょうだい名称の男称一女称区分が琉球語にはいまもみられる。その対立はハワイ語などに指摘されているタイプとおなじであるようだが、この辺のことも対照研究でさらにほりさげる余地があるのではないか。

いまあげた点だけからでも、中国語、日本語の方言を、さらには中国少数民族言語をふくめた対照研究は、今後すすめる価値があるだろう。

陳露さんは本書を出発点として、ゆくゆくは名詞全般にわたって語彙的・文法的な性質をとりあげようとしており、研究にも着手している。この点からみて、品詞体系のなかでの、すくなくとも主要な品詞の体系における名詞の位置づけが、たえず念頭におかれることになる。以下では陳露さんの今後の研究の発展をいのりつつ、その名詞のことについて、松本のかんがえるところをのべてみる。

単語は文とともに言語のもっとも基本的な単位である。単語は、語彙的なものと文法的なものの統一物として、語彙＝文法的な単位であ

る。そのような単語の語彙＝文法的な分類の結果とりだされるのが品詞である。

言語外の現実をうつしだし、文の対象的な意味にかかわる品詞、つまり主要な品詞には、名詞、動詞、形容詞、副詞がある。主要な品詞は、人間言語の発展のなかで、語彙的な意味や、文法的なはたらきのちがいに応じて、歴史的に分化してきたものだろう。

主要な品詞のなかで中心的な位置をしめているのが名詞である。名詞は、その語彙的な意味の中心部において、動詞、形容詞が分担しないモノ、ヒト、トコロ、トキなどをさししめすことにくわえて、中心からふみだせば、動詞や形容詞とかさなる動作、変化、状態、性質などの領域にまでひろがっているからである。こうして、名詞は、対象的な意味をもつ単語の代表者であるかのように、言語のつかいてに理解されているようだ。（日本での）こどものことばあそびであるしりとりで、きまったルールがあると意識したことはないが、動詞や形容詞をださないで、もっぱら名詞をつらねるべきことは、無意識にまもられているという気がする。

また、人間の言語活動がまだ一語文的だった時代は、品詞の分化があったとはいえないが、それでもその時代に動物言語とちがって、対象的な意味をもつ単語がみられたはずだから、なづけ作用があったといえる。こうしてできあがった原初単語は、品詞分化以前だから原品詞としかよべない単位である。しかし、それに、以降の言語とのつながりをもとめて、かりに品詞の名をあてがうとしたら、主要な品詞のうちで、副詞は無論のこと、形容詞、動詞も適切でなく、なづけ作用との関連でやはり原名詞ということになるのではないか。主要な品詞のなかでも名詞には歴史的にみてもそれだけのおもさがあるだろう。

こうして、名詞の問題を言語研究のたちばからとりあげるとなると、名詞の内容的なゆたかさのため、でだしから名詞をまるまるあつかうことはできない。名詞の下位体系をとりだして、それらをひとつひとつしらべていくことが、迂遠なようでも実践的である。本書はその実践の最初の成果だが、さらにあつかいをひろげるとなると、とりわけ名詞の語彙的な内容面においては、さきにみた指示対象の多様さ

から、言語外の現実も、これまた全般にわたって、つまり森羅万象が関心の領域にわたっていることがもとめられる。

陳露さんならこのような研究ができると松本は信じている。陳露さんが精励してうまく、たゆみなく研究をつづけるタイプであることを、本書のもとになった論文作成の過程で、松本はみているからである。陳露さんの努力によってよい結果がえられるために、中国の大学での研究条件が、日本のばあいとちがって、今後一層よくなることをねがって、もとめられた序文のようなもののむすびとする。陳露さんのこれからの研究に、松本もまなばせてもらうつもりである。

松本 泰丈

(日本・別府大学客員教授、中国・復旦大学客座教授)

目次

序論	1
1. 先行研究の概観と問題提起	1
2. 研究目的	14
3. 研究方法	16
4. 研究対象と研究資料	20
5. 本研究の特色	21
6. 本書の構成と表記	22

第一章 対人意識と言語表現	25
第一節 対人意識と言語の表現形式	25
第二節 現代日中両言語の言語形式と対人意識	26
第三節 対人意識と人称代名詞、親族語彙との関わり	27
第四節 本研究における基本概念と分類	28
4.1 先行研究の見方	28
4.2 本研究における基本概念と分類	30

第二章 日中両言語における人称代名詞の体系	35
第一節 先行研究	35
1.1 日本語の場合	35
1.2 中国語の場合	36

	1.3 対照研究の立場からみた問題点	36
第二節	現代日本語における人称代名詞の体系	37
	2.1 現代日本語における人称代名詞の構造分析	37
	2.2 語源・語構成と歴史的変遷	41
	2.3 現代日本語における人称代名詞の体系の特徴	53
第三節	現代中国語における人称代名詞の体系	56
	3.1 現代中国語における人称代名詞の構造分析	56
	3.2 語源・語構成と歴史的変遷	57
	3.3 現代中国語における人称代名詞の体系の特徴	67
第四節	現代日中両言語における人称代名詞の体系の異同	69
	4.1 類似点と相違点	69
	4.2 「上・下」「ウチ・ソト」の意味内容と本質	69

第三章	日中両言語における親族語彙の体系	71
第一節	先行研究	71
	1.1 日本語の場合	71
	1.2 中国語の場合	72
	1.3 対照研究の立場からみた問題点	73
第二節	現代日本語における親族語彙の体系	75
	2.1 現代日本語における親族語彙の構造分析	75
	2.2 語構成と意味変化	77
	2.3 現代日本語における親族語彙の体系の特徴	82
第三節	現代中国語における親族語彙の体系	85
	3.1 現代中国語における親族語彙の構造分析	85
	3.2 語構成と意味変化	88
	3.3 現代中国語における親族語彙の体系の特徴	101
第四節	現代日中両言語における親族語彙の体系の異同	103
	4.1 類似点と相違点	103
	4.2 「上・下」「ウチ・ソト」の意味内容と本質	104

第四章 人称代名詞及び親族語彙の使用に関する調査 108

第一節	先行研究	108
1.1	アンケート、事例調査によるアプローチ	108
1.2	文学作品の資料調査によるアプローチ	110
1.3	成果と課題	112
第二節	予備調査——事例調査報告	112
2.1	調査項目	112
2.2	調査対象	113
2.3	事例資料の報告	113
第三節	日中両言語における言語資料の紹介	124
3.1	日中両言語の作品内容と登場人物の関係	125
3.2	用例集	129
3.3	基本データ	129
第四節	表現の視点と語彙の基準	138
4.1	人称代名詞の場合	138
4.2	親族語彙の場合	139
4.3	表現形式のタイプ	141

第五章 日本語における人称代名詞及び親族語彙の運用 147

第一節	自称の場合	147
1.1	表現形式の特徴	147
1.2	各人物間における運用の状況	157
第二節	対称Ⅰの場合	164
2.1	表現形式の特徴	164
2.2	各人物間における運用の状況	169
第三節	対称Ⅱの場合	176
3.1	表現形式の特徴	176
3.2	各人物間における運用の状況	183
第四節	他称の場合	189
4.1	表現形式の特徴	189

	4.2 各人物間における運用の状況	197
第五節	運用の特徴と表現形式の選択要因	202
	5.1 運用の特徴	202
	5.2 表現形式の選択要因	204

第六章 中国語における人称代名詞及び親族語彙の運用

		210
第一節	自称の場合	210
	1.1 表現形式の特徴	210
	1.2 各人物間における運用の状況	226
第二節	対称Ⅰの場合	233
	2.1 表現形式の特徴	233
	2.2 各人物間における運用の状況	242
第三節	対称Ⅱの場合	247
	3.1 表現形式の特徴	247
	3.2 各人物間における運用の状況	259
第四節	他称の場合	265
	4.1 表現形式の特徴	265
	4.2 各人物間における運用の状況	284
第五節	運用の特徴と表現形式の選択要因	290
	5.1 運用の特徴	290
	5.2 表現形式の選択要因	292

第七章 日中両言語における人称代名詞及び親族語彙の運用の相違

第一節	表現形式と運用状況の相違	296
	1.1 自称の場合	296
	1.2 対称Ⅰの場合	298
	1.3 対称Ⅱの場合	300
	1.4 他称の場合	301
第二節	選択要因の相違	302

2.1	意味論的な要因	303
2.2	構文論的な要因	304
2.3	語用論的な要因	305
第三節	転用と一体化現象	306
3.1	表現の視点と語彙の基準の置き方	306
3.2	転用表現の相違と一体化現象	307
第八章	言語形式と社会的文化的背景	309
第一節	日中両言語の人称代名詞及び親族語彙に見られる対人意識の相違	309
第二節	対人関係のあり方と現代日本語の表現形式	311
第三節	対人関係のあり方と現代中国語の表現形式	312
結論		314
補論		323
付表：言語資料一覧		325
参考文献		326

序 論

1. 先行研究の概観と問題提起

人称代名詞と親族語彙は日中両言語において重要な研究課題として盛んに研究されており、多数の先行研究が残されている。ここでは、これらの先行研究を概観してその成果と問題点について考えてみる。

1.1 「人称代名詞」について

1.1.1 日本語における「人称代名詞」研究

「人称代名詞」はもともと、「格 (case)」「数」の問題に関わる西欧文法の用語の一つであった。日本語においては、「人称代名詞」は人称や格や数により語形や動詞語尾の変化がないことで、西欧語のそれとは異なるものとされるが、普通、「一人称代名詞」「二人称代名詞」「三人称代名詞」と分けられる。それぞれ「自分」「相手」「自分、相手以外の人または事物」を指し示し、また会話のときにはそれぞれが「自称」「対称」「他称」になるという見方が一般的である。

日本語における代名詞の研究は、明治末期から始まり、定義、分類、機能、範疇などいろいろな問題について文法論的にも語用論的にも語史的にも様々の立場から盛んに行われてきた (cf. 大槻1898、安田1928、松下1930、山田1936、橋本1948、時枝1950、佐久間1953、板倉1952 etc)。とくにコソアド問題について研究者は大きな

関心を持ち、多数の論考が見られた（cf. 佐久間1953、三上1955、高橋1956、井手1959、池上1972、岡村1972、正保1981、内間1986 etc.）。しかし、代名詞には「指示」と「話し手との関係概念を表す」という機能が認められるものの、どちらが特質または本質なのか、どのような語を代名詞とみなすかは研究者により異なる。また、称格において、一人称代名詞（自称）と二人称代名詞（対称）はそれぞれ話し手と聞き手を指すという共通認識に達しているが、三人称代名詞（他称）と不定称についてはいまだ定説がない（cf. 内間1984）。したがって、代名詞の体系についても様々な見方がある。

「人称代名詞」は上に述べたような、広義のものと「人のみを指し示す」という狭義のものとがある。後者の「人称代名詞」についての研究は、コソアド系代名詞ほどなされていないようであるが、上古の人称代名詞「あ」「あれ」「わ」「われ」の使い分けとその新旧関係について文法的な働きの違いから考察した山田1936がある。また、菊澤1936は「あ」「あれ」「わ」「われ」が共存しえたのは、それぞれの意味機能が異なるからであるとしている。

人称代名詞の研究は、時代別の人称代名詞または個々の語の歴史的変遷についての考察が特徴の一つである。たとえば、佐藤1962、辻村1968、池上1972、鈴木・林1973、内間1986などが挙げられる。そのほか、「人代名詞」が各時代に異常な発達・交替を遂げたという事実に対して、「待遇に支配された」結果とみて、敬意を失った語の代わりに新しい語が出てきたと指摘した小林1936、日本人の「ウチ・ソト」の意識構造と関連させて、共同の場で生きる「われ」と「なんじ」の関係に基づく一、二人称代名詞の交替を考察した大野1978、1999がある。大野1978の論考ではこれらの関係が「代名詞の体系とどう関わるのかということについての言及はほとんどなされていない」（内間1984：27）が、日本人の意識構造に基づく人称代名詞の研究としては評価したい。

運用については、事例調査やアンケート調査という社会言語学的方法を用いて場面差と関連させて人称代名詞の使い分けについて考察したものに、渡辺1963、芝本1974、橘豊1977、柴田1980などがあ